

式ノモノトスレド、多クハ中潜ヲ以テ内外ヲ分チ、内露地、外露地ト稱スルモノヲ二重露地ト云フ、露地ニハ、石ヲ配置シテ行歩ニ便ニシ、庭中ニハ多ク樹木ヲ植エテ、幽靜ノ趣ヲ添フ、腰掛ハ又待合ト云フ、來客先ヅ相會シ、又中立ノ時ニ休息スル所ナリ、而シテ二重露地ニハ、外腰掛、内腰掛ノ二アリ、

## 〔茶道筌蹄一〕茶會

往昔は茶會チャエといへり、太平記に佐々木道譽など茶會を催すといふ事あり、紹鷗、利休居士の時代に至て、茶チャの湯ユと稱す、茶の湯チャユと佛家に奠茶オシヤ、奠湯オシユを略して茶湯チャユといふ、居士是に混ぜざるやうに、茶の湯といへりしとぞ、

## 〔對清雜記上〕茶ノ湯 茶ノ會

或人茶ノ湯ハ、佛ノ茶湯チャユニモアラズ、湯ハ會ノ誤ニテ、茶ノ會ト云事也トイハレシハ、恐クハ僻ガ事ナラン、案ルニ會ハ聚也、聚カ然レバ茶ノ會ハ、數人ウチ集テ茶ヲ點ズルコトヲイフ、又湯ハ茶ヲ和スベキ爲ニ湯ヲ設クレバ、茶ノ湯トハイフナリ、醫家イヘル者流ニ用ル所ノ、ナニノ湯ユソレノ湯トタルナリ、サレバ其本ハ異ナレドモ、皆茶事ヲ設ルコトニテ、後々ハ茶ノ會、茶ノ湯共ニ通ジ云ヘル例多シ、

## 〔柳亭記上〕茶の湯 たばこの煙

茶の湯と古くいひしは、手業の事にはあらず、茶を煎じたる湯の事なり、今茶をのむ茶をまいらせよなどいふは、湯の字を略たるなり、茶の湯をのむ茶の湯をまいらせよといはざれば、本來は聞えず、麥を煎じたるを麥湯といふに同じ、それが茶式の名となりてより、常にのむを茶の湯といはざるもおかし、榮西僧正の著、喫茶養生記に、茶及桑葉の徳をあげて、唯可喫茶飲桑湯、勿飲他湯、桑湯茶湯不飲、則生種々病とあるにて知るべし、此書建保二甲戌春正月とあり、茶の湯とつゝ